

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02625

研究課題名(和文)近代ロシア文学現出の舞台 ロシア文学史における貴族屋敷(ウサーチバ)の意義

研究課題名(英文)Emergence of Modern Russian Literature--Country Estate in History of Russian Literature

研究代表者

坂内 徳明(BANNAI, Tokuaki)

一橋大学・ 名誉教授

研究者番号：00126369

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ロシア近代の社会と文化を考える上で不可欠な貴族屋敷(ウサーチバ)という文化現象を近代ロシア文学の現出をめぐる「文化的ランドシャフト」(環境)として捉え、近代文学の成立と文化とウサーチバの内的関連性を考察することにより、その点は十分に行われた。

コロナ禍のために一年を延長した本研究は、全体として5ヶ年にわたったが、先行する同内容の研究(課題番号25370345)からの継続もあって、今回の科学研究費研究の成果としては、二冊の報告書(2019年度、論文6本、124p.、2021年度、論文6本、150p.)を刊行したことは、ロシア文学ならびに文化史研究の分野における大きな成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本のこれまでのロシア近代文学研究は、文学作品の翻訳と、本国ロシア・ソビエトの研究に対応した形での作家・作品研究が行われてきたが、本プロジェクトが取り上げた貴族屋敷に代表される社会・文化の基層的コアとの関連で、近代ロシア文学を捉える研究はほとんど見られなかったと言える。

その意味で、貴族屋敷という現象自体の取り扱い方、ならびに、文学と社会・文化現象との関連性の把握と理解をめぐる問題は残るとはいえ、この研究対象の多面性・多層性は間違いなく、学際的アプローチの不可欠さと併せて、今後のロシア文学研究ならびに文化研究にとって最重要の現象であることが確実に論証できたものと考えている。

研究成果の概要(英文)：The main project of this study is to examine the significance of the Russian country estate (usad'ba), which has been the indispensable target for the Russian Cultural Studies and played the role of the "cultural Landschaft" or "environment" of modern Russian Literature. We have published two big Reports of this project(124 p. and 150 p.), which has concluded 12 articles, translations and bibliography. These valuable studies are the first approach to the Russian Literature Researches in Japan.

Results of this project have indicated the importance of this cultural-historical phenomenon - usad'ba and have made it clear to study more and more from the viewpoints of interdisciplinary approach.

研究分野：ロシア文学・文化史

キーワード：ウサーチバ文化 貴族屋敷 近代ロシア文学 文化的ランドシャフト 貴族文化 貴族の巢 近代文学の現出 ロシア文学史

1. 研究開始当初の背景

(1) 着想 研究代表者と研究対象との関わりは、1990年代半ばにウサーチバ(貴族屋敷)文化をめぐって生まれた強い興味に始まる。その契機は、ロシア中世文学研究者D・リハチョフ著『庭園のポエジー』(原本は1982年刊行、邦訳『庭園の詩学』1987年、平凡社)であり、もう一つは、アメリカ人研究者P・ルーズベルト著『ロシア田舎屋敷の生活 社会・文化史』(Roosevelt P.R. Life on the Russian Country Estate: A Social and Cultural History. 1995)である。ソビエト期に、特に本国では、ウサーチバが、革命前の支配階級である皇室・貴族の所有物だったためにほとんど顧みられず放置され、研究もごく一部の個別領域を除いて着手されなかった中で出現したこの二つの労作は、ウサーチバ文化を正面からテーマとして、文学史・庭園史と社会史・文化史からのアプローチによって論じた刺激的な先行研究である。

(2) 開始とメンバー 科学研究費助成事業としての始まりとして、具体的には2010~2012年度『ロシア貴族屋敷文化研究 その社会的諸相と文学性』、2013~2015年度『近代ロシア文学創成の環境 貴族屋敷(ウサーチバ)の文学的・社会的ランドシャフト』(研究分担者:金沢美知子、鳥山祐介)を行い、これら二つの研究成果を2012年度、2015年度にそれぞれ報告書(95p.、176p.)として発表した。今回の『近代ロシア文学現出の舞台 ロシア文学史における貴族屋敷(ウサーチバ)の意義』(基盤研究C)と題された研究(研究分担者は金沢、鳥山、佐藤千登勢の3名)は、先の二回のプロジェクトの後継であり、2017年度に開始され、2019年度に中間報告として同タイトルの報告書(124p.)を刊行している。

2. 研究の目的

(1) ウサーチバという文化現象の把握(概念的・歴史的・言説的) これまでのロシア研究において正面から扱われることがほとんどなかったウサーチバという現象を理解するため、基本的概念の把握を行う。そのために、まず、社会経済史関連の研究史を概観し、併せてウサーチバ通史を記述する。次に、表象・言説レベルでのウサーチバ認識について後付け、いかなるイメージが与えられてきたか(現代における継承を含む)を調査・解明し、その成果を公表する。

(2) 文学とウサーチバとの関係の解明 ロシア文学史の視点に立つとき、ウサーチバ文化の全盛期と19世紀前半における散文小説という形式の確立とは微妙なズレを見せる。19世紀後半のロシア文学で知られる一般的なウサーチバ・イメージ 広大な領地を背景とする自然描写と貴族の優雅な生活様相 は、一部が同時代を反映しながらも、同時に、作家の幼少時代への記憶と回想・ノスタルジーに依る部分が多い。こうした問題群を文学とウサーチバの構造的関係(「文化的ランドシャフト」として捉え、その関係性を具体的に検証して、その成果を公表する。

3. 研究の方法

(1) 文献調査によって、歴史ならびに基本的概念の全体、地域性(特に、「古典的」様相を示すモスクワならびに中部ロシアのウサーチバと、時に、これと対照的なタイプ、具体的にはペテルブルク=近代国家の形成後に生まれた帝都近郊ならびに主に北西ロシア地域のウサーチバとの関連に重点を置く)を解明する。この点は、主にウサーチバ研究史のフォローを意味するが、現代の研究状況の確認も並行して行う。

(2) 現地調査を行うが、可能な限り、タイプの異なる地域のウサーチバを選択する。その際、特に(1)に記した二つの異なるタイプがあることに留意する。

4. 研究成果

(1) ウサーチバ史とロシア近代の理解 貴族屋敷(領地屋敷、領主館)との訳語を当てたウサーチバという対象は、日本のこれまでのロシア研究では未知数だったと言える。研究代表者はこの点について、まず、ウサーチバがいかなる文化現象か、に関して事典項目の執筆を行った(以下の文献)。さらに、2021年度・成果報告書に掲載した論考()では「 .問題整理」の中で「1. ウサーチバとは何か ウサーチバというコトバ、歴史概略、ウサーチバというカタチ」として記した。特に、強調したのは、18世紀初頭のロシアの近代化事業とウサーチバとの関わりである。中世・モスクワ期のいわば自然発生的な地主・貴族文化から、近代国家の下で領地所有を開始した新興貴族の文化へと急速に変貌したこと、別の言い方をすれば、前者の基盤に後者が重なっていったこと(重層化)そして、ウサーチバ文化は18世紀半ばから19世紀初頭に全盛期を迎え、19世紀前半から半ばにかけて衰退していったことを明らかにした。

(2) 18世紀文学におけるウサーチバ表象 研究分担者の金沢美知子、鳥山裕介は18世紀ロシア文学研究の専門家として、同時期に書かれた作品テキストの読解を通じてウサーチバをめぐる表象の分析を行った。金沢のN.M.カラムジン、感傷主義文学史に関する考察()また、鳥山によるG.R.デルジャーヴィン、V.V.カプニストの紹介とデルジャーヴィン作品の分析()はいずれも、日本では未開拓の領域を切り拓くものであり、両者の成果が、本プロジェクトが目ざすウサーチバ文学史・表象史の今後の研究に重要な布石となることに間違いはない。

(3) 20世紀におけるウサーチバ表象 研究分担者の佐藤千登勢は、ウサーチバ文学の代表作であるI.ツルゲーネフ作『貴族の巣』の映画化作品(監督A.M.コンチャロフスキイ)の詳細な画像分析を通して、現代におけるウサーチバへの記憶と表象について考える貴重な視点を提供した()。20-21世紀には、実体としてのウサーチバが存在しないにもかかわらず、記憶を通して、ウサーチバがロシア文化の原像として社会の基層に現存している点からすれば、今後とも文学と映像の関連性を含めて、多面的なウサーチバ研究が待望されることは明らかである。

(4) 19世紀ロシア文学とウサーチバ 19世紀文学を生みだした個々の作家のバイオグラフィとウサーチバ、作品中のウサーチバ描写等の問題については、今回の研究では、テーマ自体の広がり大きさ、研究体制づくりの難しさを考慮して敢えて取りあげなかった(もちろん、この問題群の重要性を否定するものではなく、ごく一部の作家(チェーホフ)のウサーチバ像を論証した成果()はある)。それを補う形で、多数の関連文献が収集され、現在、そのリストを準備中である。さらに、論点整理を行うことで、以下の問題点としてまとめた。

(5) ウサーチバ文学というテキスト、ウサーチバ文学史の構築 18世紀半ばから19世紀初頭にかけてのウサーチバ文化全盛期に、ウサーチバは詩という形式・ジャンルによってしか表現できなかった(その時期のウサーチバ描写の全体像は、ズィコヴァの著作()を参照)。それに続き、貴族文化が頂点から衰退へと向かう1830年代以降の「散文の成立」以降、ウサーチバは日常の習俗として描写の素材として選択され、「ウサーチバ・テキスト」(シシューキン)

が一気に、かつ大量に生まれた。さらに、19 世紀半ば以降のロシア文学におけるウサーヂバ表象は、その多くが L. トルストイの自伝的三部作や K. アクサーコフらの作品を想起するまでもなく、作家・思想家が体験した幼少期の回想の再構成によって生まれたことになる。同時代の、腐敗し、崩壊・破滅していくウサーヂバをめぐる地主と農奴・農民との関係を、時に皮肉と諷刺を、時にノスタルジーを発揮し、また、冷徹な観察と非難を込めて描写したゴーゴリ、ツルゲーネフ、ネクラソフ、サルティコフ＝シチェドリ、ピーセムスキイ、スレプツォフ、オストロフスキイらの作品の中で、さらに、19 世紀後半から大きく発達した郊外住宅（ダーチャ）での生活ぶり、そこでの人間心理の機微と自然の美しさの変化、そして、チェーホフ、プーニン、ベールィ、ナボコフらによるウサーヂバ崩壊の凄まじい様子と残像の表現をたどるならば、そこには、20 世紀初頭までのウサーヂバの歴史そのものが浮かび上がる。このような意味から、近代ロシア文学は、イコール、ウサーヂバ文学であり、近代ロシア文学史はこのウサーヂバ文学への視点を抜きに成立しえず、叙述できないというのが、本研究から得られた知見である。

(6) 現地調査 当初の計画では、2020、2021 年度に現地ロシアのウサーヂバ（ペテルブルク近郊、ロシア北西部）の訪問調査を行う予定だったが、これはコロナ禍によって断念した。2017 年度からの三年間に行った調査地は以下の通り。2019 年度（8 月 7 - 15 日）・・・モスクワ市内（ピョートル宮殿、ブラツェヴォ、クジミンキ）レニングラード州（エリザヴェチノ、イズヴァラ、トロソヴォ、ペテルブルク市内キリヤノヴォ 2018 年度（8 月 7-18 日）・・・コストロマ（市内カルツェフ家ウサーヂバ、カラビハ）ヴォログダ（モジャイスコエ、ポクロフスコエ）チフヴィン（リムスキイ＝コルサコフ・ミュージアム） 2017 年度（2017 年 8 月 3-17 日）・・・スモレンスク（フメリタ、タラシュキノ、ノヴォスパスコエ、スロヴォダ）

(7) 研究成果の公表 全体で 6 本の論考を収めた報告書（2021 年度、150p.）を刊行した。

引用文献

『新版ロシアを知る事典』（2004 年 平凡社）、『ロシア文化事典』（2019 年 丸善出版）の「ウサーヂバ」「ウサーヂバ・庭園」の項目

坂内徳明「ロシア貴族屋敷（ウサーヂバ）研究 これまでの道程」『近代ロシア文学現出の舞台-ロシア文学史における貴族屋敷（ウサーヂバ）の意義-』（2017-2021 年度科学研究費助成事業・基盤研究（C）・研究成果報告書・2021 年度）

金沢美知子「ロシア感傷小説と理想の領主像」/『報告書・2019 年度』

鳥山祐介「ワシーリー・カプニスト「オブホフカ」日本語訳および解説」『報告書・2019 年度』、同「詩的表象としてのズヴァンカ デルジャーヴィンの書簡詩《エヴゲーニーに。ズヴァンカの生活》（1807）が描くウサーヂバ」/『報告書・2021 年度』

佐藤千登勢「映画『貴族の巢』に刻まれたウサーヂバ表象の一断面」/『報告書・2021 年度』

佐藤洋輔「『桜の園』における本の役割/健康的 喜劇的なその継承」/『報告書・2021 年度』

ズィコヴァ E.P. 編『18 19 世紀初頭のロシア詩における村の生活』（2005、モスクワ）

シシューキン V.G. 「ロシア文学のウサーヂバ・テキスト」「ウサーヂバ・テキストの起源にて」を含む彼のウサーヂバ文学論は『貴族の巢の神話』（1997、クラコウ）に収録

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 金沢美知子	4. 巻 20
2. 論文標題 近代文学に見る「ペードヌイ」の変化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本大学研究員研究報告書	6. 最初と最後の頁 38-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金沢美知子	4. 巻 65
2. 論文標題 ドストエフスキーと1840年代のロシア	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ユーラシア研究	6. 最初と最後の頁 19-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金沢美知子	4. 巻 臨時増刊
2. 論文標題 「分身」とその構想	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 275-284
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金沢美知子	4. 巻 20
2. 論文標題 近代ロシア文学に見る「ペードヌイ」の変化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本大学研究員研究報告書	6. 最初と最後の頁 1 - 20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤千登勢	4. 巻 2
2. 論文標題 ニコライ2世を偲んで：『マチルダ 禁断の恋』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ロシアNIS調査月報	6. 最初と最後の頁 115-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤千登勢	4. 巻 4
2. 論文標題 現代ロシアの女性映画：『神聖なる一族24人の娘たち』と『パイ・ミー』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ロシアNIS調査月報	6. 最初と最後の頁 125-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤千登勢	4. 巻 8
2. 論文標題 不滅のゴゴリ：『魔界探偵ゴゴリ』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ロシアNIS調査月報	6. 最初と最後の頁 106-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂内 徳明	4. 巻 36
2. 論文標題 生涯、在野にて - ロシアの巨人アンドレイ・ポロトフのこと	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 放送大学研究年報	6. 最初と最後の頁 171 - 182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金澤美知子	4. 巻 17
2. 論文標題 18世紀、ロシアに旅した人びと	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部研究員研究報告書	6. 最初と最後の頁 14 - 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂内徳明	4. 巻 34
2. 論文標題 グリャーニエ (民衆遊歩) の発見	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 放送大学研究年報	6. 最初と最後の頁 93-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂内徳明	4. 巻 35
2. 論文標題 エカテリンゴフ円遊頌詩論考	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 放送大学研究年報	6. 最初と最後の頁 77-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂内徳明	4. 巻 38
2. 論文標題 エカテリンゴフ園遊パノラマ論考	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 一橋大学社会科学古典資料センター年報	6. 最初と最後の頁 26-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金沢美知子	4. 巻 16
2. 論文標題 ロシア市民社会の形成過程に見るヨーロッパ近代の表象	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部研究員研究報告書	6. 最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金沢美知子	4. 巻 17
2. 論文標題 18世紀、ロシアに旅した人びと	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部研究員研究報告書	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤千登勢	4. 巻 5
2. 論文標題 英雄都市の表象	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ロシアNIS調査月報	6. 最初と最後の頁 112 - 116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤千登勢	4. 巻 9-10
2. 論文標題 ロシア革命百周年に寄せて？	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ロシアNIS調査月報	6. 最初と最後の頁 104 - 107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 金沢美知子
2. 発表標題 文学に見るヨーロッパ貴族社会の女性たち
3. 学会等名 世田谷文学館友の会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 坂内徳明（編著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 科学研究費成果報告書	5. 総ページ数 124
3. 書名 近代ロシア文学現出の舞台	

1. 著者名 鳥山祐介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 331頁の内、21-53頁
3. 書名 超越性 と 生 の接続（貝澤哉、杉浦秀一、下里俊行編）	

1. 著者名 坂内徳明（編著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 科学研究費研究成果報告書	5. 総ページ数 150
3. 書名 近代ロシア文学現出の舞台	

1. 著者名 井桁貞義他編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 348
3. 書名 スラヴァンスキイ・バザアル (坂内徳明 ソヴィエト期ロシア民俗学史)	

1. 著者名 井桁貞義他編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 348
3. 書名 スラヴァンスキイ・バザアル (坂内知子 岩倉使節団とプリンツ・オリデンプルクスキー)	

1. 著者名 沼野 充義、望月 哲男、池田 嘉郎 (坂内徳明「ウサージバ・庭園」)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 886
3. 書名 ロシア文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>本プロジェクトは、全体で5ヶ年にわたる研究期間の中で報告書として2冊の論文集を刊行したことは大きな成果である。ともに、「近代ロシア文学現出の舞台」と題されたもので、6本の論文(124ページ)、同じく6本の論文(150ページ)を収録する。さらに、同種のテーマを掲げた先行する研究成果分の2冊も含むならば、全体で4巻のウサージバ文学論集が完成したこととなる。全4巻に収められた論文ならびに翻訳、研究ノートの日次は最新の報告書に掲載されている。</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鳥山 祐介 (Toriyama Yusuke) (40466694)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	
研究分担者	金澤 美知子 (Kanazawa Michiko) (60143343)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・名誉教授 (12601)	
研究分担者	佐藤 千登勢 (Sato Chitose) (90298109)	法政大学・国際文化学部・教授 (32675)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	佐藤 洋輔 (Sato Yosuke)		
研究協力者	ニコラエフ ニコライ (Nikolaev Nikolaj)		
研究協力者	坂内 知子 (Bannai Tomoko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------